

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第二三章 午前一時一五分 午前二時三分

ミス・ペティグールはびっくりしました。あえくような声を出します。

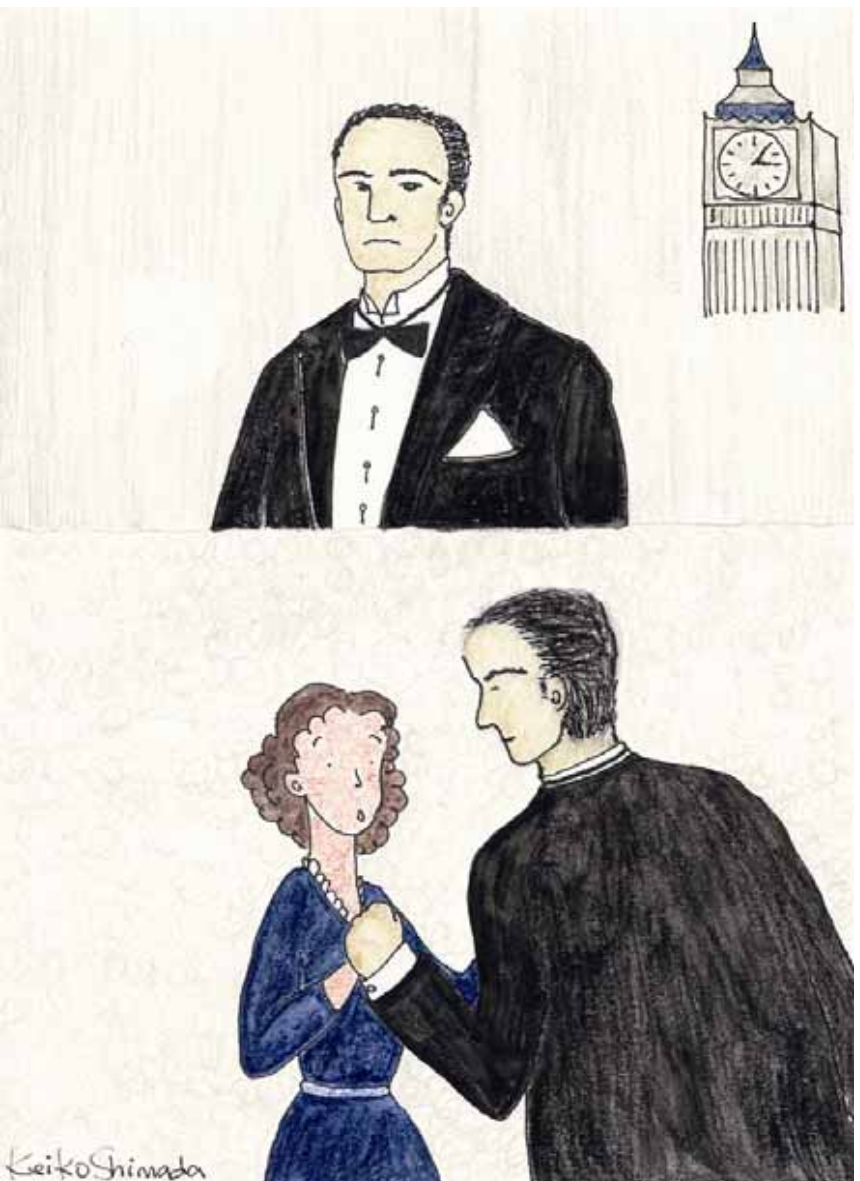
「あたくしにおつやうごさうじょうさるたのですの。」と耳を疑つちうに聞きました。

その光榮に浴したいのですが、そう言つて、シヨは優雅なお辞儀をしました。

「ああ。」とミス・ペティグールは悲しげに言いました。「あたくしダンスができませんの」

シヨはこつくりしました。

「私もそつななんです」とシヨ。「踊れるふりをしていただけでね」



島田圭子画



「ジョージはアンジェラが好きなんです」「ジョーは何でもなれそうに言いました。それにアンジェラもジョージが好きだ。しかし、あの娘は私の金のほつがもつと好きでね。二人はあれで結構幸せでしょう」

「ミス・ペティグルはこれには何と申すのか分からず、黙っていました。」

「あらあら」とミス・ラフォースが明るい声で言いました。

「もう二人で抜け駆けね。驚いちゃっわ、グウィネヴィア。いらっやい、マイケル。二人はお仲間、四人はお邪魔よ」

二人も踊り去っていきました。

「ミス・ペティグルはどきどきしながら座っていました。男性が、自分から選んであたくしと付き合って座っているなんて。しかもこんな素敵な男性が。そつしなくちゃならない事情もありませぬ。自分で選んだのですから。ただの礼儀からだたとしても、素晴らしい好ましい態度です。ミス・ペティグルの顔は感謝の気持ちで輝きました。どうもありがとつございませぬ」とミス・ペティグル。「お付き合ひくださりまして、親切に。あたくし、ミス・ラフォースの晩をだいなしてゐるんじゃないかと心配はじめておりましたの。あたくしを一人にしたままダンスをなせなさいとびす。」「わい、わい、一回は踊っていただけませぬ」

「親切ね、ジョーはよく笑いました。」「ミス・ペティグル、お礼を言つのはおつひです。痛いまめとつおめから救つてくださったんですから。生まれるときは足の足が支える重さはたつたハポンドばかりでしたが、残りが必要以上に大きくなりすぎまつたね」

「ミス・ペティグルはのちよつとした冗談に微笑みました。でも、会話に少し不安がありました。知らない男性と一対一で、相手を楽しませるのは慣れていませんし、なにを言つていいかわかりませぬ。でも、すべしそんな心配は吹き飛んでしまつた。おしゃべりは自然に進みました。難しくなんかありません。おしゃべりの種は回つからやつぎまつた。

お酒を勧められ、断る場面がありました。いよいよいゝお友達の話題がありました。それが「ジョーの仕事の話がありました。」

「元セッターです。」「元ジョー。」「元セッターはさういふ金になります。付き合つておき相手と付き合えばね。私はどうしたんです。もし女性の……まあ、どこかは言ひませんが、分かるでしょう。とこかく、ある部分から一インチ取り除くことができれば、一財産を作れます。」「元セッターの時代は終わるとか言われてますな。一、怪しいもんだ。一、上流の女性たちが私のところを押し寄せるといふのならびつへりなれますよ。生まれつき恵まれていない完璧な身体つきを手に入れようとしてね。私の地ならしがなかったらジョリアンのドレスがああいつふつに見えると思われませぬか？ とんでもない。見えませぬよ。出っ張りがいや、そのお分かりでしょうが……前やら後ろやらですな。それがどんな芸術もだいなしてついでついで」

「ミス・ペティグルはわくわくしながら座っていました。初対面の男女の会話の話題としては驚くべきものでしたが、お天気について語り合つたりも一十倍も面白かったです。下品な話ではありません。ビッグなビジネスの話なのです。昨日だったらいたい誰が信じたでしょう。今日、ミス・ペティグルが対等に大事業について語りながら座っているなんて。優しい



ミス・ペンディグルは立ち上がりました。

ジヨーがお辞儀をします。腕をミス・ペンディグルの腰に回しました。はじめの一二三拍ためらっていました。が、やがて踊りの輪に加わります。ミス・ペンディグルは目をぎゅっと瞑っていました。「これこそ最高の瞬間です。ああ、ナポリを見て死ね。ミス・ペンディグルはジヨーの腕と夢のよつな軽やかなリズムに身を委ねました。

ジヨーはダンスが上手でした。さつき不吉なことをほめかしていましたが、彼のお腹のどっぴりが身体に押し付けられるのは心地よい感覚でした。若い頃、ほんの数回、出席したことがある社交の場は、おとなしいワルツだけが許されていたのですが、そのときのパートナーは、いつも高年齢の紳士方で、おかげでミス・ペンディグルはパートナーの立派すぎるウエスタのやや気まずい「いちなま」には大変、詳しいのです。

「元璧だ」とジヨー。若い世代の連中はワルツの踊り方を知らないので。これほど素晴らしいのはありません。

ミス・ペンディグルは宙を踏んで、椅子に戻ってきました。頬は紅潮しく、瞳がきらきらしています。

「びびいわ、大嘘つきね」とミス・ラフォースがつかきます。「踊れないって言ったくせに、ワルツと座っていたかっただけなんじゃない」

「まあ、そんな」とミス・ペンディグルは恥ずかしく、ピンクに染まって言いました。「あたくしが知っているワルツだけなんですのよ、本音」

ミス・ペンディグルはしばらくの間、ジヨーに近づいた態度でいました。もしかしてジヨーが変なことを考えていたら困りますもの。夜食が出てきました。ミス・ペンディグルは驚いたこと、またお腹がすいてくること、口がさびきました。真剣に食べ始めます。

「アイスはどうぞ」とマイケル。

「いただきますわ」とミス・ペンディグル。

マイケルは片目をつぶりました。「うまいはずだ。なにしろオーナーのお得意だからね、確かミス・ペンディグルはくすくすと笑いました。ミス・ラフォースは怒ってマイケルをにらみつけていましたが、でもそのアイスは驚異のきばえでした。ミス・ペンディグルはこれまで自分が意地汚いと思ったことはいちどもありませんでしたが、これはただの冷やしたカヌードではありません。クリームとワルツとナッツとアイスクリームと素晴らしいシロップ。それがみんなたぐみに調和しています。——さつき、神々しい供物にふさわしいの食べものを舌で味わう味わいました。

バンドがゆっくりとした、眠たげなフォックストロートを始めました。ライトが暗くなります。薄闇が室内を覆いました。ミス・ペンディグルが夢見るような気分で顔を上げたとき、ワルツがテーブルに向かってくるのを見えました。突然、アイスの味がなくなりました。

テーブルとテーブルの間を縫うように、ワルツがゆっくりと近づいてきます。その目はミス・ラフォースを見めています。表情はほとんどありません。目つきもほとんどです。でも、ミス・ペンディグルは背筋が寒くなりました。薄い自製の膜がその目を覆っているだけなのが感

じられます。いその膜が破れ、激情の炎が燃え上がるかもしれませぬ。

ミス・ペティグレルは慌てたようにテーブルを見回しました。誰もミックを見ていません。照明が落とされ、甘い音楽と賑やかな食べもので、みんなゆったりとロマンティックな気分になつています。恋人たちは互いにさつきより身体を寄せ合っています。マイケルは誰よりも近くに身体を寄せていました。腕を大っぴらにミス・ラフォースに回し、茶色の髪の毛を恋人の金髪の頭の上に傾けています。何か熱心に話して、ミス・ラフォースは真剣な、まるで恥ずかしがっているような表情を浮かべていました。

ミックがテーブルたどり着きました。

「デリシア」とミックが声をかけます。「俺たちのダンスだ」

テーブルの全員が突然しんとまりました。バンドは演奏を続けています。踊っているカップルたちがフロアを横切っていききました。照明は淡く落とされたままです。だれも隅のテーブルに気がついていません。

ミス・ラフォースの身体はびくんと、目が動いてミックの視線に出会います。薄暗がりの中でその顔は口く浮き立ち見えました。

「ああー、ミックー、ミス・ラフォースは呆然としたようにおそやさきました。

マイケルは固まっています。両顎の筋肉の横が張り出しています。ほとんどのミス・ラフォースの肩に回した腕の力を強めました。

「悪い、マイケルは言いました。」「デリシアは俺の曲を愛してこの曲は俺の曲だ」

「デリシアは忘れてしまった」とミックが静かな声で言いました。「俺の要求の方が優先されるべしだ」

ミス・ペティグレルの心にさまざまな思いが入り乱れました。途方に暮れてあたりを見渡します。他の恋人たちはみな、控えめに、無関心な顔をしてその方を向いています。「これはミックとデリシアとマイケルの問題なのです。その間に誰にも関係のないことです。ミックは敵に回すには嫌な男です。誰も助けくれませぬ。でもどうにかしなければ。ミス・ラフォースはまた間違いを犯しかけています。蛇の目にはまわれればおそきは逃げようがありません。ゆっくりとほとんどのミス・ラフォースはマイケルの引きとめようとする腕から逃れていきます。ミス・ペティグレルは泣き出しそのつじになりました。

そこに立っているミックは、悪魔のまじりにサムで、輝く瞳はくすぶる光を放っています。浅黒い顔は苦みばじって有無をいわさない感じのです。身体には暴力的で嫉妬深い男の怒りがみなぎり、ミス・ラフォースを自分の情熱と欲望の、せじな的な楽園にさらってしまっています。

ミス・ラフォースはもう自分の椅子に真っ直ぐに座って、大きな目にはミックの目しか映っていません。

「来るのがデリシアっ、ミックが言いました。

「あたし……、ミス・ラフォースが口を開きました。そして立ち上がったのです。

ハネ仕掛けのまじりマイケルがその横に立ち上がりました。

「トントン」

ミスラフォースは小さな、困り果てた声をあげて息を止めました。必死の眼差しでツクに訴えかけます。

「悪いが、このダンスは予約済みだ」とマイケルは息詰まる怒りを込めて言いました。

「残念ながら間違いがあつたらしいな」とツクは滑らかに言いました。「しかし、俺はデリシアに話があるんだ。大事なことだ」

「ツクはその圧倒的な眼差しをすべてミスラフォースに降り注ぎました。ミスラフォースが一步踏み出します。」

「駄目……もつ駄目だわ」ミスパティグルは心の中ですすり泣きます。「もし今、行ってしまつたら、もつ二度と彼から逃げられないわ」

ミスパティグルは自分のことなど少しも考えていませんでした。ミスラフォースを救つというこの難局のために知恵を振り絞り、神経を尖らせます。その目は三人の間を必死で行ったりきたりしていました。マイケルの絶望的な顔。唯々諸々と従つてしまつミスラフォース。ツクの強い、暗い人を動かさずには置かれな「目」。

ミスラフォースはためらいがちに一步を踏み出しました。マイケルが空しく呼び止めます。

「トコシヤ」

「めだ……」「めんなせ」とミスラフォースはむしするにもできずに言いました。悲劇的な眼差しをマイケルに向けます。

「ああ……」ミスパティグルは思いました。その目は苦痛にゆがんでいました。マイケルはどうするかしら……。またやけを起すのでしょつ。また警官をぶん殴るわ。そしたら今度は六〇日牢屋に入れられてしまつ。どつしましょつ。ああ、どつしましょつ。( )

そのとき大啓がひらめきました。

「どつと席をはずすよ」とツクが言いました。

「ツクをぶん殴りなせ」とミスパティグルが金切り声を出しました。

マイケルはぶん殴りました。「ツクは倒れ、椅子とテーブルがひっくり返りました。すぐに立ち上がったその顔は青さめ、目は怒りでぐらぐらしています。マイケルは両足を軽快に構えています。その顔には不敬な喜びがあふれています。身体は次の動作に備え、目は光り、口元には愉快そうな笑みが浮かんでいます。」

「ツクは拳骨が届きそつなうしろまでマイケルに飛びかかり、そこぴたりと止まりました。かすかな、ほんのかすかな躊躇のぶるえがその顔に浮かびました。ラテンの血に特有の計算高さです。マイケルは名譽のためなら何も気にしません。しかし、ツクは違いました。三人のウエイターが駆け寄って仲裁に入ります。「ツクはそれをとめませんでした。照明が明るくなりました。踊っていた人たちは立ち止まって驚いたようにあたりを見回します。バドが鳴り響いていました。もっと大勢のウエイターが現れました。はちの巣をついたような大騒ぎです。ミスパティグルはマイケルの腕をひっつかみました。」

「田のよ」とわめきます。運命の女神、キングメーカー、それがミスパティグルです。

マイケルは言つたことを聞きました。しびしびではありましたが。でも輝かしい血のだけりを満

足させるより、デリシアのほつがずっと大切です。

マイケルはミス・ラフォースの腕をとり、ドアに向かって引張っていきます。ミス・ラフォースは従いました。トトはミス・デューハリーを、ジロアンは中ジローを、マティンはペキーを、ジョージは今のつちとはかりにアンジェラをひつつかみました。ペティグルト將軍は全軍をせきたてます。ジョーがその後ろで雷のような声を出しました。

「あいつはいつも気に食わなかった」

みんなはドアのところに着くと、耳障りなバンドも、興奮した人々の声も、それをなだめるウイターの声も、怒り狂うツクも置いてきぼりにして玄関に転がり出ました。女性たちは急ぎ足でクロクルムに向かいます。ミス・ペティグルトは毛皮のコートをとり、みんな階下に降りてくると、男性たちが待っていました。そして全員で夜の街にすべりたのです。

冷たい湿った二一月の空気が顔にふきつけました。しょぼしょぼと中途半端な雨が降っています。ミス・ペティグルトは、屋内の眩しい光から急に暗いところに来て目をばちくりしました。暗いところになると、一行は中にいたときよりもずっといぶん大勢のように見えました。みんな興奮して話し、ヒスアリックな笑い声を立てています。それから一〇人ほどの声が「タクシー、タクシー」と呼び始めたようでした。女性たちはそれぞれ、誰か男性が、所有権を主張するように腕をとっています。ミス・ペティグルトの他は、急に、人ごみのなかでミス・ペティグルトは途方にくれ、おびえ、孤独を感じました。高揚した心の風船は針でつつかれてしまっていました。突然、自分は一人ぼっちだということを出したのです。そのとき、ひととき大きな声がこっぴど怒鳴っているのが聞こえてきました。

「ミス・ペティグルト。ミス・ペティグルトはどこですか？ ミス・ペティグルトをお送りしたいんですが。ミス・ペティグルト？」